

キヌサヤエンドウ「紀州さや美人」の採取時の莢状態が小ほうの発生および収量に及ぼす影響

1. はじめに

暖地園芸センターで育成した果梗に小ほう（ハカマ）の発生が少ない多収品種「紀州さや美人」の普及には、多くの健全な種子が必要となります。そこで、現在、採種に最適な条件を検討しています。今回は採取時の莢の状態が小ほうの発生および収量に及ぼす影響について紹介します。

2. 試験方法

品種：「紀州さや美人」

試験区：熟度の異なる5段階を設定（図1）

〔莢状態1：実は充実しているが、緑色の状態。〕

〔莢状態5：乾燥し、緑色の部分がない状態。〕

莢採取日：2011年5月16日

（採取後は莢のまま室内で乾燥）

脱粒日：2011年6月21日

保存温度・期間：5℃・14か月

耕種概要：播種日：2012年9月20日、うね幅：150cm、株間：10cm、1条、1穴2粒まき（1株に間引き）、主枝一本仕立て、ガラス温室栽培、最低気温5℃



図1 「紀州さや美人」の採取時の莢状態と乾燥後の種子

3. 試験結果

（1）小ほうの発生

小ほう発生率は、12月まで莢状態1が他の区よりも高く推移しました（図2）。特に収穫が安定して行えるようになった11月以降では、12月で小ほう発生率の差が大きく、莢状態1は他の区より10%以上高くなりました。一方、1月以降はすべての区で小ほう発生率が低くなりました。

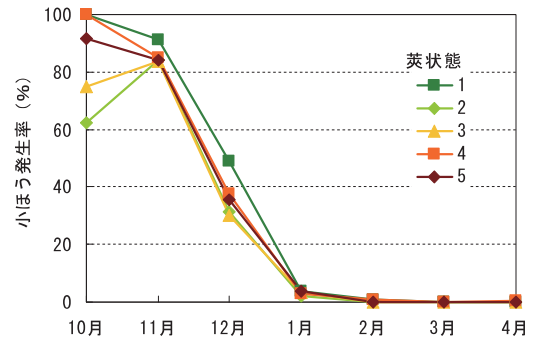


図2 採取時の莢状態が小ほう発生率に及ぼす影響

（2）収量

総収量は莢状態1が最も少なくなりました（図3）。莢状態1では11月の収量が少なく、これが総収量の低下につながりました。莢状態1は初期生育が遅かったため、その結果、11月の収量が少なくなったものと考えられました。

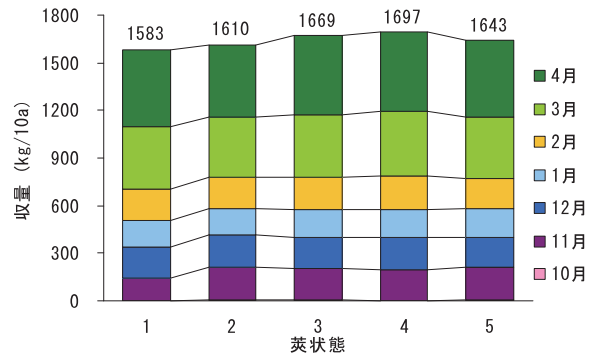


図3 採取時の莢状態が収量に及ぼす影響

4. おわりに

試験の結果から、莢が緑色でまったく褐変していない状態で採取すると、初期の小ほうの発生が多く、初期の収量が少なくなることがわかりました。これまでの試験結果（農業試験場暖地園芸センターニュース40、42号）も含めて考慮しますと、登熟の進んだ莢を採取することが望ましく、最低でも変色し始めた状態（莢状態2）以降で莢を採取すると、初期生育や初期収量を確保でき、小ほうの発生も少なくなることが明らかとなりました。

（育種部 小谷 泰之）